
初動の指示(2)

(国土交通省東北地方整備局、東日本大震災の実体験に基づく災害初動期指揮心得、パナックス・ジャパン、仙台、2013、46-54)

2014年10月17日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

第4項 情報発信の準備

報道機関を通じて的確に提供された情報は、避難や救援活動のための貴重な判断材料となる。

的確な災害対応を行っていても、情報を適切に発信できていないために、世の中に必要な情報が提供されないことは過去によく発生している。適切な情報発信を欠いた災害対応は的確とは言わないと理解すべきである。情報発信は災害対応の重要な一部である。

大規模災害においては、平時とは比較にならないほどの情報発信業務が発生することになるので、体制の強化は心すべきである。

大規模災害においては、報道機関を通じて国民に適切に情報提供するため、また場合によっては厳しい取材に対応するため、通常の広報担当に加えて、情報発信の体制を強化するとともに、取材窓口となる担当者を特定すべきである。

初動期においては、情報が十分整理できない中での発信となる上に、情勢は刻々と変化していくので、情報を的確に発信するために、各段階に応じたメッセージを用意すべきである。

あわせて、情報発信についての基本方針の策定、取材への便宜供与の準備、定期的な情報発信の準備、インターネットを使った情報発信の準備など、体系的な情報発信について準備を始める必要がある。

第5項 リエゾン派遣(県・自衛隊)

国土交通省には、的確かつ迅速な災害対応を実施するため、被災自治体の災害対策本部へ、積極的な情報収集を行う「リエゾン(災害対策現地情報連絡員)を派遣する制度がある。

リエゾンは、本局側の後方支援業務にバックアップされることで役割を果たすことが出来る。本部の支援が不十分な場合、派遣先での存在感にも影響し、ますます情報をとれなくなる悪循環を起こす。

大規模災害が発生した場合は、横断的な被災状況を把握し、各機関の連携をスムーズにするため、直ちに関係県にリエゾンを派遣するとともに、必要に応じて自衛隊とリエゾンを交換する。

リエゾンが派遣されたら、彼らからの情報の収集・とりまとめ、彼らへの情報提供、リエゾンの滞在環境の把握・改善、交代要員の準備などの後方支援業務を、的確に実施することを忘れてはな

らない。

第6項 記録

専門の記録班を設けなければ、災害対応業務に忙殺されて埋没してしまうことになる。一方、各員も、発災直後からメモをとることを習慣とすべきであるが、全てのメモには日時を記入することがポイントである。

道路啓開の完了など結果の記録はよくとられるが、指示の流れや途中経過については残りにくいので、特に心がけて記録することが必要である。

将来にわたり災害の被害と対応を伝承するため、被災物は災害の威力と恐ろしさを後世に伝える臨場感のある歴史記録となる。モニュメントとなる建築物などの巨大なものから、道路標識など中小のものまで、伝えることを意識して保存すべきである。

的確な指揮のため、対外的な情報発信のため、そして、災害対応の反省・教訓を引き出すために、発災直後からの記録は重要である。専門の記録班をおくとともに、各員が活動記録を整理する習慣も必要である。特に、ごく初動時の記録はとり忘れてしまうことが多いので、日頃から「発災即記録」と心がけていなければならない。

写真やビデオの撮影は非常に有効である。また、災害対策室の室内カメラの録画やテレビ会議の録画、管理区間に設置されたカメラ映像の録画など、さまざまな機器の記録にも留意すること。

内部用の記録と、外部への情報発信用の記録では、写真の取り方も異なることがあり、区別して意識することが肝要である。

なお、被災物(管理施設およびそれ以外も含め)についても、保存について留意すべきである。

【考察】

大規模災害において、情報は避難や救援活動のための貴重な判断材料であり、適切に発信される必要がある。しかし、大規模災害においては、平時とは比較にならないほどの情報発信業務が発生し、情報が十分整理できない中での発信となる上に、情勢は刻々と変化していく。そのため、情報発信の準備や体制の強化をすべきである。

情報発信のための記録においても専門の記録班だけでは限界があるため、個人の記録が重要である。日頃から各員が活動記録を整理する習慣が必要であり、研修などにおいて徹底することが望ましいと考えられる。